

二〇二一年度

入 試 体 験

国 語

受験上の注意

- ・「はじめ」の合図あいずによつて始めなさい。
- ・問題は9ページまであります。問題用紙に不足がないかどうか確認しなさい。
- ・問題用紙と解答用紙に受験番号、氏名を記入しなさい。
- ・「答」はすべて解答用紙に記入しなさい。
- ・時間は50分間です。

受験番号	
氏	名

アレセイア湘南中学校

【一】 次の――部のカタカナを漢字に、漢字をひらがなにしなさい。

- 1 山の中をタンケンする。
- 2 シンゾウの音を聞く。
- 3 民衆をヒキいる。
- 4 北海道のボクジョウに行く。
- 5 アジア諸国がサカえる。
- 6 羊のムれ。
- 7 ギロンに熱が入る。
- 8 リエキを追求する。
- 9 畑をタガヤす。
- 10 この本は読む力チがある。
- 11 社長の座を退く。
- 12 他と比べて易しい問題だ。
- 13 相手の挙動を注意深く見る。
- 14 天皇と皇后。
- 15 野党の意見を聞く。
- 16 読点を打つ。
- 17 車窓からのけしきを見る。
- 18 貴重な意見をいただく。
- 19 大昔から存在する生物。
- 20 本番で実力を発揮する。

【二】 次の各文の□に適切な漢字一字を入れ、四字熟語を完成させなさい。

- 1 出身地が同じで、意気□合する。
- 2 試合の状況に一□一憂する。
- 3 前代未□の手口の事件が起こる。
- 4 わたしは□柔不断な性格だ。
- 5 無我□中に勉強に取り組む。

三 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

ときどき、1 世界の見方が変わる本に出会う。ジャンルはさまざま。小説もあれば、ノンフィクションもある。哲学の本もあれば数学の本もある。その本を読む前と読んだあとでは、世界の見え方が変わる。テレビのニュースを見ていても、それまではただ漠然と受け流していただけだったが、「そういうことだったのか」と考える。

1、ファッションについての本を読む。いままでAというブランドの洋服もBというブランドの洋服も似たようなものだと思っていた。たいした違いはない。ほとんど見分けがつかない。

2、ファッションについての本を読むことで、AとBの違いが見えてくる。BはAの模倣にすぎないことがわかってくる。いちどその視点を身につけると、街を歩く人の服装が「読める」ようになってくる。

逆もある。いままでAとBはまったく違うものだと思っていたのに、本を読んだのがきっかけで、じつは2 本質的に同じだということが見えてくる。ジャンルを超えて、たとえば洋服と自動車と鍋と椅子のデザインにある共通性が見えてくるかもしれない。

隠されていた差異に気づくこと。異なるもののなかにある同型性を見抜くこと。読んだ本は、読んだ人の目のなかに残る。その「目」は、新たな本を読むことで更新されていく。

本を読んだあとで、覚えていられるのはごくわずかだ。本をまるごと暗記することなどできない。暗記などなくても、本をまた読めば、書いてあることは確認できる。

むかしむかし、ソクラテスという人がいた。哲学というものはじめた人のひとりといってもいいかもしれない。ソクラテスは本に反対だった。考えたことや話したことを、文字にして本にしてみようと、人は大切なことを忘れてしまうかもしれないから。大切なことは覚えておくのがいちばんだ。

でも、ソクラテスの弟子の3 プラトンは、ソクラテスがいうことを文字にして本にして残した。それが伝えられて現代のぼくたちもソクラテスがいったことを読める。

忘れるのはしかたのないことだ。でもすべて忘れるわけではない。忘れないこともある。10%でも1%でも、なにかが残る。なにかが残ればいい。忘れることを恐れる必要はない。忘れるのは忘れてもいいことだから忘れる。それに、いちど忘れたと思っても、また思い出すこともある。思い出すことでまた、新しい記憶がつけられる。

忘れてしまったからといってがっかりすることはない。忘れたら、思い出す楽しみができたと思えばいい。

本に書いてあること、本に載っていることがすべてではない。

国語辞典を例に考えてみよう。国語辞典にあらゆる言葉が載っているだろうか。そんなことはない。国語辞典にもいろいろ種類があって、大きさを分けると大中小とある。中学生や高校生が使うのは、小辞典や中辞典、学習辞典などだろう。大中小の国語辞典はそれぞれなにが違うか。いちばんの違いは収録されている言葉の数だ。語彙数という。大辞典にはたくさん載っている。小辞典には少ししか載っていない。

じゃあ、大辞典にはすべての言葉が載っているか。残念ながらそうではない。大辞典をつくる国語学者や編集者は、すべての言葉を載せたいと思っている。しかし、新しい言葉がつきつぎと生まれる。そのなかには、テレビで芸人が使って流行した言葉や、若者が仲間内で使いはじめて広まった言葉などもある。新しい言葉、流行語のなか

には、3年もすれば使われなくなり、忘れられてしまうものもある。たぶんそうやって消えていく新語や流行語のほうが多いだろう。でも、定着していく言葉もある。言葉は常に新しく生まれる。

新しい言葉を辞書に載せるか載せないか。辞書づくりにかかわる人がいちばん悩む問題だ。すぐ消えていくような言葉は載せたくない。でも、どの言葉が残り、どの言葉が消えるかは、言葉ができたときはまだわからない。だから辞書はいくら改訂かいていして新しい版になっても、そこからこぼれ出てしまうものがある。辞書は常に **4** 生の言葉を後追いでいくしかない。

新しい言葉だけじゃない。ごく一部の地方だけで使われている言葉が発見されることもある。その地方の人びとにしてみれば前からずっとあったのだから新しいものではない。発見なんていういい方は失礼かもしれない。でも、**5** 辞書をつくる人は気づかなかつた。辞書に載っていない言葉はたくさんある。

できるだけたくさんさんの日本語を載せようという大辞典ですら載らない言葉がある。中辞典は大辞典よりも収録語彙数が少ない（大辞典と中辞典の違いは語彙数だけじゃないけど。）小辞典となれば、もっと少ない。

でも、実際に生活していると、小辞典ぐらいでじゅうぶん間に合う。本や新聞や雑誌を読んでいてわからない言葉が出てきたり、書けない漢字があったら引く。小辞典で間に合っていれば、なんとなく小辞典にはすべての言葉が載っているような気持ちになる。だけど、実際には小辞典に載っていない中辞典に載っている言葉があるし、中辞典より大辞典のほうがたくさんさんの言葉が載っている。そして、大辞典にも載っていない言葉がある。

それは図鑑でも同じだ。植物図鑑にすべての植物が載っているわけではない。昆虫図鑑にすべての昆虫が載っているわけではない。植物学者や昆虫学者、図鑑の編集者たちが「すべてを載せたぞ」と思っても、新しく発見される植物や昆虫はいる。そして、未発見の植物や昆虫も世界にはたくさんいるだろう。現実の世界は **3** の世界よりも大きい。

ところがときどき **6** 考え方が逆立ちしてしまう。本に載っていないことはウソだと錯覚さっかくしてしまうのだ。植物図鑑に載っていない植物は植物じゃない。昆虫図鑑に載っていない昆虫は昆虫じゃない。国語辞典に載っていない言葉は言葉じゃない。まさか！本よりも世界は大きくて広い。本を読んでもわからないことはたくさんある。

（永江朗『本を味方につける本』より）

問一 —— 部1「世界の見方が変わる本に出会う」とありますが、どのように見方が変わるのですか。答えなさい。

問二 **1** ・ **2** に当てはまる言葉を次から選び、番号で答えなさい。

- 1 また
- 2 でも
- 3 なぜなら
- 4 たとえば

問三

——部2「本質的に同じだ」という意味を表す言葉を次から選び、番号で答えなさい。

- 1 魚心あれば水心
- 2 泣きっ面にはち
- 3 五十歩百歩
- 4 悪事千里を走る

問四

——部3「プラトン」の行動によってどのようなことが起きましたか。次の中から最も適切なものを選び、番号で答えなさい。

- 1 ソクラテスが言ったことを本として残したことで、後世の人々がソクラテスの言葉や考えを知るこ
とができた。
- 2 ソクラテスの言葉や考えを文字にして残すことは禁止されていたのに、本にして残すことで、プラト
ンは人々から哲学者として認められ、有名になった。
- 3 ソクラテスの言葉や考えを本にまとめたことで、ソクラテスの考えは新たな学問として世界中に広
がった。
- 4 ソクラテスは大切なことを忘れないように本を読まなかったが、プラトンに説得され、自分の言葉を
本として残すことにした。

問五

——部4「生の言葉」とはどういう言葉ですか。本文中の言葉を参考にして、十字以内で答えなさい。

問六

——部5「辞書をつくる人は気づかなかった」のはなぜですか。次から選び、番号で答えなさい。

- 1 今まで作られた辞書には載っていない新しい言葉だったから。
- 2 流行の中で自然に出てきた言葉で、すでに消えた言葉だったから。
- 3 ごく一部の地方だけで使われていたため、広く知られていなかったから。
- 4 どの場所でも知らない人がいないありふれた言葉だったから。

問七

3に当てはまる言葉を本文中から一字で抜き出し、答えなさい。

問八

——部6「考え方が逆立ちしてしまう」とは、どういうことですか。次から選び、番号で答えなさい。

- 1 本は書く人によって左右されるため、辞書にはまだ載っていない言葉がたくさんあると考えること。
- 2 本は素晴らしいものであるが、本に頼り過ぎると現実を見る姿勢が失われてしまうと考えること。
- 3 本の内容をうのみにせず、自分の考えをしっかりと持つことが生きる上で大切であると考えること。
- 4 本にはすべてのことが載っていると思ひ込み、本に載っていないものは正しくないと考えること。

四 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

「今日は伸子が来るらしいぞ」

え？

おじいさんは、ぎゅっとひとつ笑って、そのまま行ってしまった。

母さんが来る。母さんがこの家に来るんだ。ぼくは純粋にうれしかった。おじいさんのうちに引越してから、まだ間もなかったから、それほどの恋しさはなかったけど、母さんに会えるのはやっぱりうれしかった。

母さんと離れて暮らすことにたくさんの心配はあったけど、思っていたよりも気持ちは落ち着いていたし、不安に思うこともほとんどなかった。母さんがここにいてくれれば、と思うことはあったけど、ついこないだまでの
1 母さんとの二人きりの生活に戻りたいとは思わなかった。

ぼくは自分で意識しないうちに、おじいさんという、母さん以外の身内の存在をとても心強く感じていた。母さんがいなくなったたらどうしよう、というぼくの最大の心配事は、²杞憂^{きゆう}だった。ぼくにはおじいさんがいた。そして、今は離れているけど母さんもいるのだ。二人いれば大丈夫なんだ、という根拠のない自信はぼくを元気にさせてくれた。

「行ってくる」

と言って、おじいさんが仕事に行ったあと、ぼくはいつものように廊下^{ろうか}の雑巾^{ぞうきん}がけをはじめた。今日も暑くなりそうだなと思う。

誕生日。毎年思うことだけど、ぼくが八月一日生まれというのはまるで似合わないような気がする。夏の誕生日の子たちは、明るくて元気で活発というイメージだ。

ギィという耳慣れた音がした。ぼくは高い位置にあった腰を落とし、正座のような格好^{かっこう}になって、木戸のほうを見た。黒い日傘^{ひがさ}をすぼめ、少しかがんでその人は入ってきた。

「光輝」

母さんだった。

3 このときの場面を、ぼくは鮮明に覚えている。映画かなにかのワンシーンを見ているように、ぼくは、ぼくを含めた広縁^{ひろえん}と庭と木戸と母さんを、少し離れた場所から、静かな気持ちで眺^{なが}めていた。

「陽に焼けたわね」

ぼくを見て、母さんは笑った。ぼくの心の中はとて[※]だった。まだほんのわずかの日数だけど、母さんと離れて暮らしたのははじめてだったし、生まれてこのかた、よその家に泊まったことすらなかった。それなのに、久しぶりに会った母さんを見ても、ぼくの心はなぜか[※]だった。

「元気にしてる？」

母さんは広縁に腰かけて、折りたたみ式の日傘を丁寧にたたみはじめた。なんだかちがう人みたいだった。母さんはぼくの知らない白いワンピースを着て、ぼくの知らない白いサンダルをはいていた。

「うん」

と返事をして、ぼくの心はひんやりとした。ぼくの考えていた再会（といっておおげさだけど）とちがっていた。ちがっていたのはぼくの気持ちで、ぼくはもっと喜んでうれしがるはずなのに、と残念に思った。

「母さんは元気だった？」

「うん、まあまあかな」

と、ここではじめてお互いの目を合わせたと思う。「麦茶をいれてくる」と言って、ぼくは手に持っていた雑巾を片付け、台所へ行った。涼しい家の中から、縁側に座っている母さんのうしろ姿を見ると、それこそ、ぜんぜん知らない人に見えた。

「はい」

お盆に載せたふたつのコップから、母さんはひとつを手にとって、そっと口をつけた。

「ああ、おいしいわ。ありがとう」

ぼくも飲んだ。4 すっかりこの麦茶の味に慣れてしまった。母さんと二人で住んでいたときの麦茶の味はもう思い出せなかった。

「この暮らしはどう？」

いつのまにか、手を膝に置いて正座をしていた自分に気付いて、ぼくはそそくさと縁側に足を下ろした。

「うん、たのしいよ」

「おじいさんはよくしてくれる？」

「うん」

そう、よかった、と母さんは言った。

「母さんのほうは？ 仕事はどう？ みどりさんは？ 新しい家は？」

矢継ぎ早やつぎばやに聞いてしまって、これじゃあ、5 ぼくの気持ちどうらはらだ、と思った。けれど、母さんの新しい仕事のことは、頭のどこかでずっと気にかかっていた。母さんの引越ひっこし先にもぼくは行っていないから、どんな生活せいかつをしているのか、時々考えることはあった。

「仕事のほうはまだ準備段階かなあ。いろいろな準備をして、自分でいろんな勉強べんがくをしているの。お客様がつくには時間がかかるわ。」

みどりさんは、とてもよくしてくれるのよ。彼女がいなかったら、私一人ではなにもできなかったわ。みどりさんと、新しい住まいと一緒に住むことになったの。下がお店だから、ちよちうどいいのよ。広いから光輝みつこもいくらだだって泊とまりに来られるわ。

今はまだ荷物が片付いていないんだけど、あと一週間もすればきちんと片付かたくし、光輝の部屋も用意してあるの。みどりさんも会いたがたっていたから、いつでも来てね。電話もひいたから、いつでもすぐに電話でんわしなさいね」

母さんの話し方は、ひどくゆっくりだった。言葉ひとつひとつを言い含めるようにゆっくりとしゃべった。もともと静かに話す人だったけど、前とはちがう。頭の中の大事な部品のひとつが消えてなくなって、その代わりに形も材質も機能もまったく異なる部品が、聞いたこともない製造元せいぞうげんから搬入はんにゅうされたみたいだった。

その部品に名前をつけるとしたら、『現実』と『妄想』もうそうだろうな、とぼくは大人になってから思いあつた。けれど、十一歳になりたてのぼくには、それがなんなのか、もちろんわからなかった。

「これ、ケーキ。すごくおいしいって評判のお店で買ってきたのよ。あとで食べましょう」

ぼくは母さんからケーキを受け取り、当然のようにそれを冷蔵庫にしまった。冷蔵庫の中はケーキの箱を入れる隙間すきまがなかったから、ぼくはラップがかかっている漬物つけものやハムのお皿おひらをどけて、瓶詰びんづめのらっきょうや紅しょうがを

整理して、納豆のパックを横にやって、ケーキのためのスペースを作った。その作業をしながらなんとなく6 違和感が残った。その違和感に気付いたのは、おじいさんが帰ってきてからだだった。

「ただいま」

おじいさんは昼過ぎに帰ってきた。母さんを見て、眉毛を一瞬だけぴくっとさせ、「ああ」と言った。

「おじゃましています」

母さんはゆっくりとした動作で頭を下げた。ん？ と思った。おじゃましています？

ああ、そうか。ようやく合点がいった。母さんはこのうちの人ではないんだ、と。そして、ぼくはこのうちの子になったんだと。このうちの子だから、お客さんには麦茶を出すし、お客さんから頂いたケーキは冷蔵庫にしまう。お客さんだから、「おじゃましています」と言うのだと。

7 ぼくはそれを当然のように受け入れている自分が不思議だった。たったこれだけの期間で、ぼくはもうこのうちの子になってしまったんだ、と複雑な気持ちだった。

「ほら、これ」

おじいさんは大きな紙袋を持っていて、それをぼくに差し出した。中身を見ると、それは水槽だった。酸素のセツトも入っている。

「佐々木さんのとこの息子さんが昔使っていた水槽だけど、ほんの少しの間しか使わなかったみたいだから新品同様だ。これに子どもを入れたらいい」

子どもというのがグッピーの赤ちゃんだとわかるまで数秒かかって、この水槽が誕生日プレゼントとわかるまでさらに数十秒かかった。

「どうもありがとう」

ちょうどメスのグッピーのお腹が大きくなっている。明日かあさつてには赤ちゃんが生まれそうだ。どうやって親から隔離するか、考えていた矢先だった。魚すくい網を水槽に入れて、その中で赤ちゃんを飼おうかな、なんて思っていた。

「さっそく使います。おじいさん、ありがとう」

紙袋から水槽を取り出し、外で丁寧に洗った。水をためて酸素ポンプも試してみたけど、なんの問題もなかった。水槽は本当にまだ新品で、外側にはネオンテトラと水藻の写真のシールが貼ったままだった。水槽に井戸水を入れて、外に出しておいた。水道水じゃないから大丈夫だろうけど、念のために日干しすることにした。

水槽を洗っている間に、ちらりと母さんのほうを見た。おじいさんに促されて、ようやくといった感じで、中に入るのが見えた。縁側で二人でただ座っているも、ぼくはどうしたらいいかわからなかった。一緒に住んでいるときだって、特別な話をするわけではなかったけど、今の状況で二人きりになるのはちがって、それは毎日の生活の中でごくごく自然のことだった。8 けれど、今はもうちがうみたいだった。間がもたないような感じがした。たった十日しかたっていないのに。

母さんの雰囲気の前と変わったことが原因かもしれない。それともぼくのほうが変わってしまったのかもわからない。ぼくは大汗をかきながら、水槽をぐしぐしと洗った。鼻の下の汗の粒を舌でなめた。9 しよっぱい味がした。

問一 — 部1 「母さんとの二人きりの生活に戻りたいとは思わなかった」とありますが、「ぼく」がそう思ったのはなぜですか。答えなさい。

問二 — 部2 「杞憂」とありますが、この言葉の使い方として最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 地震や災害の緊急時に備えて杞憂すべきである。
- 2 二人は幼なじみで、こちらが杞憂するほど仲が良い。
- 3 店の売り上げが落ちるかと思ったが、杞憂に終わったようだ。
- 4 あまりに杞憂な展開に、こちらも付いていくのがやっとなかった。

問三 — 部3 「このときの場面を、ぼくはとても鮮明に覚えている」とありますが、この時の「ぼく」の心情を説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 母さんと久々に会えたことがうれしかったのだが、どこか落ち着いている自分を意外に思っている。
- 2 久しぶりに再会した母の雰囲気、別人のように変わっていたことに大きな戸惑いを感じている。
- 3 二度と会いたくないと思っていたはずの母が目の前に現れたことで気持ちの整理がつかないでいる。
- 4 ずっと会いたいと思っていた母の姿を久々に見て、感動と興奮のあまり言葉を失ってしまっている。

問四 「ぼくの心の中はとても ※ だった」、「ぼくの心はなぜか ※ だった」とありますが、空欄に共通して当てはまる語を本文中から二字で抜き出さない。

問五 — 部4 「すっかりここの麦茶の味になれてしまった。母さんと二人で住んでいたときの麦茶の味はもう思い出せなかった」とありますが、なぜですか。答えなさい。

問六 — 部5 「ぼくの気持ちとはうらはらだ、と思った」とありますが、このときの「ぼく」の心情を説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 次にいつ母と会えるのかわからないので、精一杯の愛情を示そうとしている。
- 2 本当は母のことが嫌なのに、心配しているような素ぶりを見せてしまっている。
- 3 母とぼくとの二人の関係がぎくしゃくしてしまったことを悲しんでいる。
- 4 母さんの新しい生活など興味がないのにたくさん質問をしまっている。

問七 — 部6 「違和感」とありますが、どんな「違和感」をおぼえたのですか、答えなさい。

問八 — 部7 「ぼくはそれを当然のように受け入れている自分が不思議だった」とありますが、このときの「ぼく」の心情を説明したものととして最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 ぼくや母、おじいさんが言葉に出さずともそれぞれのことを大切に思っていることを実感している。
- 2 母さんとおじいさんの関係が良好ではないことは、子どもながらに仕方ないことだと感じている。
- 3 おじいさんの家の子になってしまったことを短期間で受け入れる自分に複雑な思いを抱いている。
- 4 母はぼくのことを他人のように思っていることに、寂しいなどの感情が何もわかないでいる。

問九 — 部8 「けれど、今はもうちがうみたいだった」とありますが、これはどういうことですか。答えなさい。

問十 — 部9 「しょっぱい味がした」とありますが、このときの「ぼく」の心情を説明したものととして最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 母さんと再会できたことをうれしく思っていたはずなのに、以前のような感覚や態度で接することができないことを寂しく思い、やるせなさも感じている。
- 2 母さんのことを心から嫌いになってしまったってどうにもできない自分に、やり場のない怒りと不安を感じている。
- 3 母さんと同じくらいおじいさんに対して深い愛情を抱いてしまったことに、申し訳なさとはつが悪さを感じている。
- 4 ぼくと母さんとおじいさんが三人で暮らせないことに、それぞれの事情がわかっているだけに納得がいかないでいる。